

理学部附属 植物園のいきものたち 第29回 京大植物園を考える会

「植物園」という施設は「お花畑」や「芝生の公園」とはまったく異質のものです。そこは第一には植物学の研究調査のための「生きた標本庫」であり、「系統保存の場」です。同時に、学生の実習・教育の場であり、小中学生をはじめ地域の方々への情報提供の場でもあります。

「京大植物園を考える会」は、2年半にわたり30回以上の観察会を開いてきました。参加者はのべ1000人にのぼります。そもそもこの観察会は、京大植物園が植物の生態を調査観察するための場所として80年にわたり運営されてきた財産があつてこそ、運営可能なものでした。大学法人化や博物学の退潮という逆風の現代にあつて、「考える会」は観察会などを通じ、京大植物園のあり方、存在価値を問い直し、今後のより良い利用、管理のあり方を考え、また多方面からの提案を吸い上げ、80年間の財産の活かし方を京都大学に対して提案しようと努力してきました。

しかし現場での管理は、草刈りや枝打ちが頻繁に繰り返されるのみです(写真1と2:2005年11月4日)。植物園がお花畑や芝生の公園のように見なされ、また園内の樹木と街路樹との存在価値や役割の違いが認識されていないのではないかと、疑念を抱かずにおれません。

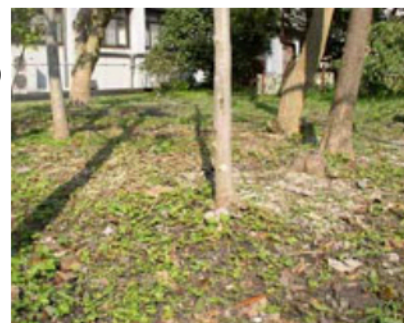
京大植物園は本来、生きた標本庫であり、生態調査の場であつたはずですが、2005年の夏から秋にかけて、開花、結実、種子散布などを著しく妨げられた植物として、キシノウブ、キツネノマゴ、シロネ、シロバナマンジュシャゲ、ドクダミ、ハンゲショウ、ヒナタイノコズチ、ミズヒキ、ミソハギ、ミゾカクシ、ミゾソバ、ヤブミョウガ、ヤマコンニャク、ヨメナ、ツタ、キササゲ、チシャノキ、ニンジンボク、ビワ、マルバチシャノキ、などが挙げられます。

考える会では取り組みの一環として、一昨年よりNF北部祭典においてパネル展やスペシャル観察会などを開いています(写真3:昨年のパネル展)。今年も特別観察会を下記要領にて実施します。たくさんの方々においでいただき、京大植物園について一緒に考える場になればと思います。

これらの中には、写真のような草刈りによって開花が著しく減り、将来的に衰退や消滅が懸念されるものもあります。せめて植物園内の植物や昆虫のリストだけでも更新されないものかと、心待ちにしています。



▲写真1



▲写真2



▲写真3